

# 観 音

平成5年7月

第19号  
年2回発行  
発集発行

広島県安芸郡府中町  
茂陰2丁目2-8-10  
真言宗 正観寺

小 出 真 行

今日一日三つの無駄を排し  
新しく大地に生きぬこう  
三つの無駄  
物の無駄 時の無駄 心の無駄

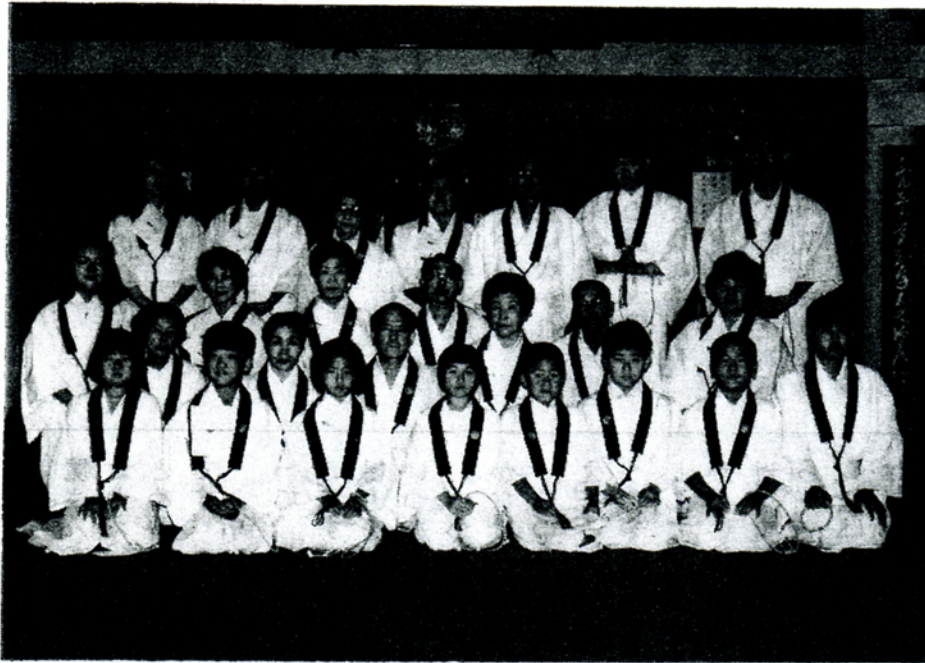
## 開 經 偈

無上甚深微妙法  
百千万劫難遭遇  
我今見聞得受持  
願解如来真實義

(無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭ひ遇うこと難し。我れ今、見聞し受持することを得たり、願はくは如来の真實義を解せんことを)

開經偈の意味をひも解いてみますと、  
「この上なく非常に立派な教えは、無限に長い間にもあうことがむずかしい。今、そうした教えにわたしはあいました。その本当の意義を知りたいものであります。」ということになります。

又、この開經偈は、音読みにしても、訓読み下し文を唱えても、さしさわりはありません。尚、これは真言宗のほか、日蓮宗、浄土宗、真宗、禅宗などの宗派で用いられています。



得度式 比治山多聞院道場於

## 『お大師様のことば』

いたずらに秋葉の風を待つつの命を待んで、  
朝露の日を催すの形を養う。

この身の脆きこと泡沫のごとく、

吾(が)命の仮なること夢幻のごとし。

無情の風たちまちに扇げば、

四大瓦のごとく解け、

閻魔の使たちまちに來れば、

六親誰をか馮まん。

(教王経開題)

この意は、秋の木の葉が風に吹かれてひらひら散っていくように、束の間の自分の命を頼みにして、朝の草葉の露が太陽の光が射してくれば消えていくような身体を、何とか保たせようと一生懸命養っている。

この肉体のもろいことは、ちょうど水に浮かぶ泡がすぐに消えていってしまうようなものであり、まるで夢か幻のようなもので、その一生はまことにはかないものなのです。

無常(ものごとの現象は、たえず移り変わっていくもので、いつまでもそのままというものはないのです)の風に扇がれると、この肉体(四大、肉体を構成している地・水・火・風)は、まるで瓦が崩れ落ちてし

まったかのように動かなくなり、やがて閻魔さんの使者があの世界からお迎えに來れば、たとえ父母、兄弟、妻子であっても、引きとめることも、どうすることもできないのです。

別れ、というものは、生あるものにとつて、悲しいものですがやがておとずれるのです。肉体はいつまでも生き続けようと総力をあげて努力していますので自分自身いつまでも生きていける様に思えますが、いつかは何人といえども彼の岸に移っていかねばなりません。

このことを自分の問題として、真剣に考えてみたことは、皆様もきつとないでしょう。やはり明日があると漠然と延ばし延ばししていることが多いのではないのでしょうか。いつかはこの世との別れが來ることだけは覚悟しておく必要があります。ですから「一度死んだ気になってみて生きる」そこには本当の生き方が、生まれてくるような気がします。



## 『仏教の目標は?』

仏教は、さとして、解脱して、涅槃に入ることを最終的な目標としています。特に古いと考えられる仏典になればなるほど、そこに出ていられるお釈迦さまの教説はこの一点に集中しています。

もっとも、一口に「さとり」とか「解脱」とか「涅槃」とかいつても、それはただの理論ではなく、修行体験の末に出てくることでしよう。「さとり」とは、わたしたちの苦しみのもとであります。これは、自身自身の心の奥底にある迷いをふっきることですが、しかし結局、「さとり」が何であるかは、さとした人でなければわからないということのようです。

時代が下るにつれまして、やがて、人々の「さとり」の素質が問題になってきます。修行に専念して比較的すみやかに到達する人もいるでしょうが、そもそも修行にむいていないというか、専念できないというか、心の迷いが多すぎてそういう真似のできな人もいます。

実に様々な点で、様々な見解、様々な修行方法が編み出され、密教の「即身成仏」の考えや、阿弥陀仏の救済に身をゆだねる浄土教の「本願他力」の考え)もその一つ

です。又、そのそれぞれについて対立や論争も生まれ、何が仏教なのか、何を目標とするのが仏教なのか非常にわかりづらくなっているわけです。やはり、仏教であるかぎり、様々な言い方はかわっても「さとり」「解脱」「涅槃」を目標とすることにかわりありません。

「極楽往生」という言葉がありますが、これは阿弥陀仏の力で、阿弥陀仏の浄土である極楽浄土に生まれさせてもらうことなのです。

ここでよく誤解があるようですが、極楽往生をありがたがる人は、さとりを目指しているのではない、したがって、本当の仏教とは関係ないのだ、と思いきんでいる人がよくいます。しかし、これは明らかに早合点、極楽往生は、なにも極楽で永遠に楽しく暮らそうという話ではないのです。今生では修行どころではない人が、いったん極楽浄土という環境のはなはだよろしいところに移動して、阿弥陀仏の指導のもとに一心に修行し、そこでさらに「さとり」を開こうというのが趣旨だそうですので、極楽往生も、結局は「さとり」を目指しているということになるといえることなのです。

### お寺の「山号」とは

例えば、観音さままで有名な浅草の浅草寺は、正式には「金竜山浅草寺」と呼ばれています。あんな平地にあるのに、何故「山」なのか不思議に思う人も多いでしょう。

実は、もともとは、本当に山の中に建立されたお寺が、その場所を示す為に使った称号だったので、中国では、道教の神仙思想の影響もあって、さかんに山岳にお寺がつくられました。なかでも有名な国清寺は、天台山という山に建立されたので「天台山国清寺」と呼ばれ、宗派の名前もそれにちなんで「天台宗」とつけられたのです。

日本では、飛鳥時代、奈良時代には、お寺は全て平地に建立されていきましたので、山号はつけられていませんでしたが、平安時代になりますと、真言宗、天台宗のお寺が盛んに山の中に建立され、山号をつける



ようになったのです。例えば、弘法大師空海の高野山金剛峰寺、伝教大師最澄の比叡山延暦寺といった具合です。鎌倉時代になりますと、禅宗の一派である臨済宗が巨福山建長寺をはじめとする鎌倉五山、(円覚寺、寿福寺、浄智寺、浄妙寺)、霊龜山天竜寺をはじめとする京都五山(相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺)というわけで、こうした五山の制を定めて保護策を講じたため、秀才が集まり名僧とった僧もたくさん出られたようです。しかし、このあたりになりますと、もはや実際に山の中にあるうがなかりうが関係がなくなってきました。このようにして、やがて、お寺だったら山号がつけられることが常識になったというわけです。

さて、古いお寺の正面にあります門も「山門」といいますが、これは「三門」とも書かれることがあります。といいますが、これは、「三解脱門」を略したもので、解説つまりさとりの境地を目指す三種類の禅定という意味です。その三種類とは、

#### 一、空解脱力

一部の物事は、実際は本性はなく妄想にすぎず、この妄想に自分がおどらされ、執着し苦しむのであると、深く心の中で思

い続けること。

## 二、無想解脱門

物事の間には、差別は全くないと心の中で思い続けること。

## 三、無願解脱門

欲望にもとづいて行動を起こすことは全くないと深く心の中で思い続けること。

この三解脱門をお寺の門にたとえたという訳です。お寺の門をくぐることにより、結局三解脱門をくぐることとなりますので、これはなかなかうまいたとえだと思えます。



今年が残念ながら、永年にわたり正観寺の復興や護持に協力していただきました方の訃報が多い気が致します。

老僧 古田真空僧上

平成五年二月四日

総代の母 升田ミヤコ氏

平成五年六月六日

伯父（元金剛保育所長）寺本晏氏

平成五年八月三日

故人の生前中のお徳を偲び、心より御冥福をお祈り致します。

合掌